

6 心の旅人

私は人の国を旅した
男も女もいる国を旅した
そこで冷たい地上の旅人誰ひとり知らない
恐ろしいことを 見聞きした

酷い悲哀の中で宿った子が 5
その土地では歓喜の中で生まれた
ちょうど私たちが辛い涙を流しながら種をまき
その果実を心躍らせ収穫するように

生れた赤ん坊は男の子で
その子は老女に預けられ 10
老女はその子を岩に釘で打ちつけ
黄金の杯でその子の叫び声をすくう

老女はその子の頭に鉄の棘^{とげ}を巻きつけ
両手両足を釘で貫き
脇腹から心臓を取り出して 15
冷たさと熱さにさらす

老女の指は神経の一つ一つを数えあげる
まるで守銭奴が金を勘定するように
老女はその子の悲鳴と叫び声を糧に生き
その子が年をとるにつれ老女は若返る 20

その男の子が血をしたたらせた若者になる頃には
老女は輝く乙女となる
若者は手かせ足かせを引きちぎり
自らの歓びを求めて乙女を縛りあげる

若者は自らを乙女の全神経に植えつける 25

まるで農夫が肥えた土に種をまくように
乙女は若者の住処^{すみか}となり
七十倍実りのある庭となる

若者はやがて老いた影としぼみ
小さな家のまわりを巡る 30
その家は彼の勤勉さで手に入れた
宝石と黄金で埋めつくされている

その宝石は人間の魂
ルビーと真珠は愛に悩む目
おびただしい黄金は痛む心 35
殉教者の呻きと恋する者の溜息

宝石はその老人の食べ物であり飲み物
彼は物乞いや貧しい者
道ゆく旅人に食べ物を施す
家の扉は常に開かれているのだ 40

老人の悲しみは人々の永遠の喜び
彼らはどんちゃん騒ぎで屋根や壁を鳴らす
ついに暖炉の火から
小さな女の赤ん坊が生れでる

その女の子は全身炎に包まれ 45
宝石と黄金からできている
誰も赤ん坊に触れようと手を伸ばすことはなく
産着^{くる}で包もうともしない

その子は愛する男のもとへ行く
老若貧富もかまわない 50
二人はやがて老いた家主を追い出し
別の家の戸口に立って物乞いさせる

追い出された老人は泣きながら遠くを彷徨^{さまよ}う
誰かが家に入れてくれるまで
目はかすみ 腰は曲がり ひどく苦しみ 55

ついに一人の乙女を手に入れる

己の凍てつく老いを和らげるため
哀れな男は乙女を腕に抱く
あの小さな家は彼の眼前で視界から消え去る
庭もその美しさも消え失せる

60

客人たちは人の国の方々に散らばる
というのも目が衰えるとすべてが変わるから
五感が恐怖に包まれ
平らな大地が球体となる

星々 太陽 月すべてが縮み
際限なく広がる砂漠
食べ物も飲み物もなく
ただ辺り一面が真っ暗な砂漠

65

乙女の幼い唇を蜜に
乙女の美しい微笑みをパンとワインに
乙女のくるくる動くいたずらっぽい目が
老人を虜にし 幼少期へと引き戻す

70

老人は食べるにつれ 飲むにつれ
日々どんどん若返るのだ
そして二人は荒涼とした砂漠を
恐怖と狼狽を感じつつ彷徨う

75

乙女は野生の牡鹿のごとく逃げ
乙女の恐怖は辺りに多くの灌木を茂らせる
その間 男は愛の様々な技に惑わされ
夜も昼も乙女を追いかける

80

愛と憎しみの様々な技で
ついに砂漠一面に
気まぐれな愛の迷路が作られる
そこではライオンに狼 猪が歩きまわる

ついに男は聞きわけのない赤ん坊に戻り 85
乙女は涙もろい老女となる
すると多くの恋する者たちが辺りを歩きまわる
太陽も星々もより近くを回転し始める

樹々は砂漠を彷徨^{さまよ}うすべての人に
甘い陶醉^みの果実をもたらし 90
ついにそこに多くの町が建つ
多くの心地よい羊飼いの家が建つのだ

しかし彼らがしかめ面の赤ん坊を見ると
恐怖がその広い地域中を襲う
彼らは叫ぶのだ「赤ん坊だ 赤ん坊が生まれたぞ」 95
そして四方八方へ逃げる

なぜならそのしかめ面の赤ん坊に触れると
その者の腕は根元まで萎れるのだから
ライオンも猪も狼も うなり声をあげながら逃げる
そしてどの樹もその果実^みを落とすのだ 100

誰もそのしかめ面の姿に触れることはできない
触れられるのはただ一人 老婆のみ
老婆は男の子を岩に釘で打ちつけ
すべてはまた私が語った通りになる

(伊藤真紀訳)